２０２６年度
社会人選抜
社会人選抜第３年次編入学

問題紙

小論文	7ページ

解答の書き方

1．解答は解答用紙の所定の欄に、はっきりと記入すること。

2．受験番号は、必ず解答用紙に記入すること。

3．解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。

4．解答用紙には、解答と受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注　意

1．監督者の「解答始め」という指示のあるまで、問題紙を開かないこと。

2．「解答始め」の合図と同時に、解答用紙に受験番号を必ず書くこと。ただし、氏名は記入しないこと。

3．問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、問題紙にページ不足・不ぞろい・印刷不良があるなど、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。

4．問題紙と下書用紙は持ち帰ること。

問題１　　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

著作権者の許諾が得られないため、本文を省略しています。

著作権者の許諾が得られないため、本文を省略しています。

著作権者の許諾が得られないため、本文を省略しています。

（出典：岡野八代『ケアの倫理――フェミニズムの政治思想』（岩波書店、2024 年）より抜粋。出題に当たり、一部を省略・変更した。）

問 1　下線部に関連して、筆者は、「上から決められた政策や法律に従って生きる」のではない政治のあり方を構想しています。それを 300 字以内で述べなさい。

問 2　問題文において、コロナ禍の初期の段階で全国の小中高に対し一斉休校要請がなされたことが取り上げられています。あなたは、これらの学校において、あるべき新型コロナウィルス感染対策をとるために必要なことはどのようなことだと思いますか。その理由を含めて、300 字以内で説明しなさい。

問題２　　次の文章を読んで、各問に答えなさい。

格差と不平等、そして階層と階級

1990 年代初頭あたりから、日本でいわゆる「格差社会」論が広まりました。70 年代に「一億総中流」と言われた時代と比べれば隔世の感があります。バブル経済がはじけ、その後非正規雇用の拡大や賃金上昇の抑制などが重なり、世の中全体に「格差」を感じる雰囲気が蔓延したのでしょう。先に論じた、社会移動*1 の絶対移動の量が減ったことも関係するでしょう。教育の分野でも、「教育格差」についての研究が 2000 年代に入ると広がっていきます。出身「階層」や親の「社会経済的地位」によって、子どもの学力や、大学進学機会などに「格差」が生じている。そういう実態を実証的に明らかにする研究です。私自身、2000 年代初頭にはそのような研究成果をいくつか発表してきました。その際、私自身も「階層」という言葉や「格差」という言葉を使って、その実態を統計的に示す、そういう研究をしてきました。

ただ、格差という言葉には若干違和感がありました。英語の感覚では inequality＝不平等というべきところを格差と言ってしまうと、そこで言われる格差という場合の「差」に、不当性＝unfairness があることが曖昧になると思ったからです。ですから私自身の著書では格差という言葉も使いましたが、肝心な箇所ではなるべく「不平等」を使いました。

さらに気になるのは、階層間の格差や社会経済的地位による格差という場合、階層にしても、社会経済的地位にしても、統計分析のために作られた便宜的な指標であり、何と何との差異なのか、さらにはその差異が生じることに不当性があるかどうかが曖昧になる印象を受けるのです。おそらく格差を英語にすれば、disparity や gap に当たります。disparity には不当な差異というニュアンスが含まれますが、gap にはその意味は含まれません。日本語の格差の場合も、不当性=unfairness のニュアンスを含めた差異という意味は、元々は含まれません。デジタル大辞泉によれば、格差は「資格・等級・価格などの違い」と定義されています。ですから、著者がこの格差という言葉に不当性＝unfairness の意味を込めるためには、そのような追加的な説明をあえてしてからでないと、その意味が伝わらないのです。不平等が不当性＝unfairness を最初から含意するのとは大きな違いです。しかも、先に論じたように、専門的研究者の間でも、格差は「階層」や「社会経済的地位」と結びつけられて論じられることがほとんどです。特定の、そして少数の論者を除き、階級間格差といった階級概念を用いた表現にはなっていないのです。

この後の議論のために、階級概念の特徴を整理しておきましょう。ギデンズやサヴィジといったイギリスの社会学者の議論をふまえた階級概念の特徴は、「生活経験の同質化」（ギデンズ）の生産・再生産に関わる、社会移動の封鎖性*2 や不平等の継続性を生み出す「歴史的に構築」（サヴィジ）された社会的カテゴリーであるところにあります。「生まれ」に強く影響される相対的な社会移動の有利不利が、世代を超えて「歴史的に構築される」、そうした「資源が不平等に形成されていく過程」に着目する社会的カテゴリーとしての階級は、それ

が担う理論的負荷ゆえに、階級間の格差を不平等とみなします。言いかえれば、不当＝アンフェアな不平等を告発するための概念としては、階層よりも階級の方が本来その理論に適っているのです。

それを「階層」間格差といってしまうと、状態としての差異を示すことはできても、それがいかに歴史的に構築されたか、その結果として「生活経験の同質化」の生産・再生産がいかにアンフェアに行われているかという階級理論に込められた含意が薄まってしまいます。以前述べたように、社会的カテゴリーとしての階級概念は、（潜在的なものを含む）対立や葛藤といった関係性を含むカテゴリーです。それゆえ、操作的に作られるカテゴリーである階層や社会経済的地位に比べ、「資源が不平等に形成されていく過程」を告発する概念としてより明確な印象を与えるのです。カテゴリー間の関係性を論じるうえで、そうした理論の蓄積をもっているということです。何度も指摘してきましたが、そのような理論との関係をふまえた上で、あえて階層を class の訳語として用いるのであれば、そのことを明白に記すべきです。

ひるがえって 2000 年代に日本で普及した格差社会という言葉を考えてみましょう。格差のある社会であることはわかりますが、何と何の格差なのか。そこで生じている「資源が不平等に形成されていく過程」がフェアなのかアンフェアなのか。格差社会という言葉にはもともとはそのような含意はありません。しかも、その格差を指示するために使われる社会的カテゴリーが、階層や社会経済的地位といった概念で捉えられる場合、あえて説明を付け加えなければ、格差の不当性は曖昧になってしまいます。格差の単位となる社会的カテゴリー間の関係性に、対立や葛藤が埋め込まれているのかもはっきりしません。かつて小泉元首相が、格差があってもいいじゃないかといった趣旨の発言を国会でしたことがあります。そのような例に見えるように、立場によっては格差は容認されるものと受け取られる可能性もあります。不平等との違いであり、階級間格差との違いでもあります。しかもこのような発言の前提となっている単位は個人であり、社会的カテゴリーによる把握を退けます。その結果、格差社会という言葉で理解されるようになった日本の不平等は、社会問題の構築という点でも曖昧さとゆるさを含んだ社会認識を生み出した、といってしまうと言い過ぎになるでしょうか。階級概念の検討を経た後では、「階級」なき格差社会論の甘さ、曖昧さが目立つのです。

対立や葛藤を避ける言葉の使用と「大衆（化）」

階層にしても格差社会にしても、告発概念として（潜在的なものを含む）対立や葛藤といった社会の関係性を言い当てるには弱さがあります。一歩踏み込んで指摘すれば、そうした対立や葛藤を避ける、ユーフェミズム（婉曲表現）といってよいでしょう。（政治的・イデオロギー的な）中立性や操作性を印象づけることで、社会カテゴリー間の対立や葛藤を見えなくさせる効果を持つのです。曖昧さのお陰であり、その分、政治的イデオロギーとの関連を予想させる、（旧来のマルクス主義的な）階級概念より、社会に受け入れられやすい。そ

こにユーフェミズムとしての働きを見ることができます。

そしてそれとよく馴染むのが、もう一つの重要な社会的カテゴリーである、大衆であり大衆化です。以前にも論じたように、「大衆化」は、凡庸化・低俗化を伴う「平均化」≒「みんな同じ」を含意します。そしてこれも以前指摘したように、高等教育の量的拡大を大衆化と理解することで、大学の大衆化が「みんな同じ」大学生を生み出すという誤認を生じさせることにもなるのです。その結果、「高等教育の大衆化」という表現・認識は、高等教育機会の不平等を論じる際の切っ先を弱めています。大衆（化）という、これも社会カテゴリー間の対立や葛藤を避けるユーフェミズムは、曖昧さを共有する格差社会論と相性がいいのです。「大衆」をベースにそこから誕生した「格差社会」は、その象徴です。そういえば、「一億総中流社会」と言われた時代に、その状態を「新中間大衆」の時代と呼んだ村上泰亮の議論は、広く注目を集めました。あえてその議論に乗っかれば、新中間大衆の社会から生まれたのが、格差社会であり、社会カテゴリーの利用という面での曖昧さを残した点では、そこに連続性さえ見ることができるのです。

高等教育の量的拡大が、私立大学の増加や拡張によって支えられてきたことは間違いありません。国公立大学より高額の授業料や入学金を徴収する私立大学への進学に際し、授業料等の家計の経済的な負担能力が問われてきたことも間違いありません。だから天野郁夫先生が 1975 年に指摘したように、「その経営構造から進学者に多額の教育費を要求する私立大学中心の量的拡大は、進学の経済的制約を低減させるよりも逆に高めるものであった」可能性が高いのです。しかし、経済的な側面への注目が当然のように受け止められたことで、その反面、経済力以外の出身階級の影響に目が向けられることが後景に退きました。その結果、大学進学の準備段階以前に生じる教育における不平等、すなわち教育における階級格差への注目も、正面から論じられることが長い間ありませんでした。

たしかに私自身を含め、（教育）社会学者の多くは、大学進学機会の「階層」間の格差を論じてきました。しかし、そこで生じている「資源が不平等に形成されていく過程」の不当性を鋭く指摘する議論としては、天野先生が指摘した 70 年代以来、政策当局に正面から受け入れられることはありませんでした。格差社会論がこれだけ広まっても、高等教育の大衆化が、高等教育機会の階級・階層間の格差を是正しているかどうかは、高等教育政策の主役にならなかったのです。アメリカやイギリスの政策論議において人種間・階級間の不平等が主題となってきたようには、日本の教育政策論議で階級間・階層間の不平等が主要な問題として認知されるようにはならなかったのです。格差の是正は言われても、それが何と何との差異を是正するか、その議論に不可欠の社会的カテゴリーの認識を曖昧にしてきたのです。その原因が階級概念の欠如にあるとは言いません。しかし、格差社会論がそれに与ったという見方はできるでしょう。対立や葛藤を避けようとする、ユーフェミズムを誘発する社会的カテゴリーを広く受け入れてきたことの問題性は問わざるを得ません。

出典：苅谷剛彦『日本人の思考――ニッポンの大学教育から習性を読みとく』（筑摩書房、2025 年）より一部抜粋。ただし、出題に当たり、一部を改変した。

*1　社会移動は絶対移動と相対移動の 2 つの概念に分けられる。絶対的な社会移動とは、親の世代から子の世代に、社会的なカテゴリー（職業や学歴など）間の移動があった場合の移動の総量を示す。例えば社会全体で高卒者が減少し、大卒者が増大した場合、絶対移動の量は大きくなる。これに対して相対移動とは、絶対移動が捉える構造的なカテゴリー構成の変化の影響を取り除いた場合、他のカテゴリーの人と比べたあるカテゴリーの人びとの相対的な移動のチャンスを捉えるための概念である。絶対移動の拡大にも関わらず、所得下位の家庭で大学進学機会が限られていれば、相対移動が少ない。

*2　ギデンズは、明確な階級が形成されるにあたって、社会移動のチャンスの「封鎖性」が重要であると指摘する。世代間での社会移動のチャンスの配分が特定の社会集団に世代を超えて有利に働く場合、「共通の生活経験」が世代間で再生産され、その結果生じる「生活経験の同質化」が階級の形成と再生産に結びつく、と主張する。

問 1　現在の日本社会で定着している「格差社会論」が内包する問題について、「階層」と「階級」の概念の違いに言及しながら説明しなさい。(250 字)

問 2　日本の高等教育政策では、教育機会の平等に資する国立大学の量的拡大ではなく、教育の質の維持に資する国立大学の量的抑制が選ばれてきた。この事実に関して、著者の見解を踏まえた上であなたの考えを述べなさい。(350 字)